

忘れ得ぬ東京大空襲

紅蓮の炎の戦い (その1)

渋谷ヨシ

昭和二十年三月十日、私にとっては忘れる事の出来ない東京大空襲の日である。戦後五十年も経っているのに、あの火の海と化し、生死を分けた妻惨な一夜は、今も昨日の如く脳裏に焼きついて離れない。

私はその日、城東区(今の江東区)北砂町に一人で住んでいた。その頃、空襲が頻繁になり、病気のために止むを得ず、千葉の船穂へ疎開しなければならなくなった叔父に代って、毎日朝早く北砂の家から、日本橋の箱崎の事務所まで通勤、夜は帰って叔父の建てた家を守っていたのである。

三月九日の夜十一時頃、突然空襲警報のサイレンが鳴り出した。私はいつものように非常袋を肩より下げ、防空頭巾を被り、紐をしぼりながら外へ出た。すると、深川辺りだろうか。私の家よりかなり離れた所、焼夷弾が落下。見る間に火の手が上り、住宅が燃え広がってゆくのが、この目にはっきりと見えた。

『今日の焼夷弾は凄いだ。』と近所の人声が聞こえた。空には敵機 B29 を探す探照燈の強い光が、何条も上り、互いに交錯しては消え、また交錯を繰り返し薄暗い空を照らしていた。

ところが、別の B29 がつぎつぎと襲来し、私の家の近くにも焼夷弾を落としたのだ。初めは私の家から五けんめに火が上った。私達は、日頃訓練を受けたように、バケツを叩きながら『焼夷弾、・落下。』と叫びつつ火を消しに駆けつけた。火力が強くてバケツの水等では手の施しようもなく、大きな家はたちまち猛火の中に包まれていった。

その中に、丸八通りにも、星さんや中村さんの家の方にも火の手が上った。B29 がどれ位飛んでいるのか、空を見上げる余裕もない。『駄目だ、自分の家を守れ。』誰かの声が耳に入った。

家に駆け戻り、二階に駆け上がった。押し入れから布団を持ち出し、窓から地面へ放り投げ、戦死した兄の遺影を燃やしてはならないと手に持ち、

米びつの上ののせて階段を下りた。

その階段だが、三月四日にも空襲があって焼夷弾が落とされ、屋根の瓦をつき破り、階段に落ちて穴があいてしまい、上り下りの時、困っていた。三月四日の昼間は箱崎にいたため、隣組の人が火を消してくれていて火災にはならなかった。夕方、家に帰ってみるとガラス戸はめちやくちやくにかげ落ち、荒れ果てていた。だが、二階は屋根に穴があいただけなので、八日までは何とか住んでいたのである。

だが、三月九日の夜から三月十日の空襲は、全く言語に絶する有様となってしまう。

私は、出した米びつと兄の写真を金魚池の側に置いて、今度は物置へ駆け込み、自転車を出して、もぐらないようにタイヤを水につけた。私の家の裏は、佐々木金魚問屋の広い池が、いくつも畦を作って金魚飼っていた。

叔父の家は、運送業だったので、再び物置へ駆け込み、日頃は手にしないリヤカーを出して、今度は池の側へ立てかけた。私は、もう一度二階へ上って本や荷物を出したかった。だがその時は、上空に高射砲の音、音、音。風は大きくなり、火の勢いは、もの凄く、再び二階へ上る勇氣は出なかった。しかし、三月九日の朝、私のすぐ前に住んでいた石井さんが、岐阜へ用事が出来て、家を留守にしたのだ。『鍵はかけないでゆくから、貴女も気をつけてな。』と別れた時の言葉を思い出し、日頃お世話になっていたので、私は何か一つでも出してあげようと、その家に騒ぎ込み、すぐ釜が目に入ったので、釜と蓋を持ち出し、池の側に置いた。

私はここまでが精一杯だった。火は隣りの奥田さんの家に燃え移り、風は烈風にかわり、燃ゆる炎と共に轟々と物凄い音を立てながら、渦を巻き、夜空を不気味なほど真赤に染め、辺り一面全く恐ろしい光景となってしまった。私は、逃げ場がないので、金魚池の畦に何人かで逃げた。ところが、そこへも火の粉どころか、柱が燃えながら飛んで来たり、崩れた火の粉が防空頭巾に落ちたり、焼けはがれたトタンまで飛んで来る有様だ。振り払うために体を動かせば、細い畦なので、池の中へ落ちそうになったり、こ

こも駄目だと今度は三月四日の空襲の焼け跡に逃げようと、畦に立った。しかし、風が強くて歩けず、這うようにして焼け跡へ逃げた。だが、この焼け跡にも回りの燃ゆる無数の火の粉が飛んで来るので、私は二階より放り投げた布団を、這うようにして取りに行き、焼け跡に運んだ。そして、その布団を池の水に濡らし、その下にもぐった。布団に火の粉が落ちると皆で助け合いつつ火の粉から逃れていた。

私は池の水に助けられている時、佐々木金魚屋さんの家は猛火に包まれていった。私は、濡れた布団の中から叔父の家を見た。火は勢いよく二階へ燃え移り、炎が窓から噴き出して真赤に燃えながら、棟が崩れていった。耐火材を使ってあるから、火に負けないと言った叔父の顔が浮かんだ。だが、この大空襲にはひとたまりもなく燃え尽くし、三月十日の朝、未明、今まで働いて築いた叔父の家は、全て、灰塵と化してしまったのである。

私は泣くに泣けなかった。小学校を終えた私を、籍は入れず養女にしようと、七年間を学校に通わせてくれたからである。叔父に恩を返さなければと、私は必死に暮らしていた。叔父の家が焼け落ちる頃、池の向こう側を黒煙と紅蓮の炎が、悪魔の如く燃え上り燃え広がり、池の上もまだまだ烈風に火の粉が飛んでいた。全く地獄そのものを見る光景であり言葉には言い尽くせない三月の十日だった。

それからどの位たったろうか。やがて燃え尽くすものは燃えつきて、烈風も段々と静まっていった。私は、布団の中から這い出して、叔父の焼け跡に佇んだ。瓦礫の中に見つけたのは、真黒に焼けた銅のバケツだけが一つ転がっていた。言い様のない寂しさがこみあげてきた。空襲の始まった頃、再び二階へ荷物を取りに飛び込んだとしたら、おそらくこの命は無かったかも知れない。家は焼けても無事だったこの身が何よりの救いと、私は暫くただ呆然と立ち尽くすのみだった。

気がついた時は、どこを見しても一帯が瓦礫と化し、余じんが燻っていた。すると『羅災証明書を発行しますから、仮区役所へ貰いに行ってください。』との知らせを受けた。私は、隣組の人達と焼け野原に張られたテントの仮区役所まで歩いて行った。

そこには、長い行列が続いていた。火傷を負った人、火の粉で目を真赤にした人、焦げた防空頭巾を被り、手足を包帯や手拭いで巻いた人、一袋の乾パンを貰って帰ってゆく親子の姿……。まさに戦場のような光景だった。これでも勝てるのだろうか。私は心の中で強く感じた。罹災証明書と一袋の乾パンを貰い、また自分の焼け跡へ帰って来た。そして、居合わせた人達でお腹を満たそうと、私の持ち出した米と、石井さんの釜で、ポタポタとしか出ない水道の水で、米もとがずに、焼け跡からトタンを拾ってきて、かまどを作って、燃え残った板切れを拾い集め、ご飯を炊いた。お菜は何も無く、本当のただ飯を握って、皆で食べ合うだけだった。

今もお握りを見ると、あの日のお握りが思い出され、物を粗末にすることは出来ない。だが、食べ合っている人の中に、日頃親しくしていた小林松子さん一家の姿が見えず悲しかった。どこへ逃げたのか、火の中に果ててしまったのか、バケツを叩き合った姿を最後に見たまま、誰も分からないと言う。釜一つを出したことを伝えたい石井さんも、今頃どこにどんな生活者しているのか、焼け跡に残して置いてきた釜も、どうなってしまったか、五十年経ても未だ消息はつかめない。

『元気でね。』『元気でね。』

腹ごしらえをした人々は、一人減り二人減り、焼け跡から去って行った。私はその人達の後ろ姿を寂しく見守るだけだった。

箱崎の事務所がどうなっているのか分からないので、自分で自分を励まし、箱崎へ歩き出して行った。その歩く道に、まざまざと見た黒焦げの死体、十字路に子供を抱えて逃げたのか、やはり黒焦げの母と子の姿が痛ましく、涙が滲んだ。焼けただれた電車、垂れ下がった電線、使用不可能となった消防車、焼け死んだ人の異様な臭いが一層悲しみを深くした。人通りも稀な焼け跡の寂しい道を箱崎まで歩いて行った。

だが、ここ箱崎の店も、知っている人の家も跡形もなく瓦礫と変わっていた。私はいよいよの無い悲しさに胸が痛かった。仕方なく、又、北砂へ引き返す途中、深川に姉の家の親戚があり、二回ほど訪ねたことがあったので、訪ねたが、やはりその家も焼かれていた。いつも私を励まして

くれた夫妻も、子等の姿も無かった。後で知ったことだが、この夫妻は煙に巻かれ焼死してしまったとの事。

私は、寂しい気持ちを押さえて北砂へ引き返した。腕時計は午後四時、今も忘れることは出来ない。

隣組の知っている人は殆ど去って、そこには、血圧で足の不自由なおじいさんと、その奥さんが途方に暮れて、瓦礫の上にしょんぼりと座っていた。私の顔を見ると、老夫婦の大沢さんは寂しそうに声をかけてきた。

『ヨっちゃん、千葉の方へ帰るなら、新小岩の知人の家までリヤカーに乗せてくれないか。頼むよ。』と言う。私は他人事とは思えずに子供の無い老夫婦が哀れに思えて、乗せて行く約束をした。

早速、焼け跡から針金を見つけ、錆びてはいたがタイヤの燃えてしまった。リヤカーと、池の中から出した自転車をつないでしばった。私の焼け布団と老夫婦の焼け座布団を積み、おじいさんをその上に乗せ座らせた。おじいさんが私の兄の遺影を持ってくれた。お婆さんが後を押してくれて一緒に歩き出した。皆、煤だらけの顔で、私は途中で靴が破れてしまい、裸足でリヤカーを引いた。年齢、二十二歳。老夫婦は八十歳に近かった。歩きながら、和洋女子大の親友、岡本多美子さんの家の焼け跡に立った。そこには焼け残った板切れに『長野へ行く』とだけ書かれ、長野の何処なのかも分からず、いいようのない寂しさがこみあげてきた。又、歩き出した。

新開橋にさしかかると、橋の袂に小学生の兄弟二人が、座ったまま寄り合って死んでいた。衣服は焼け、素っ裸のまま親を呼びつつここで息が絶えたのか、私は目頭が熱くなった。でもどうすることも出来ず、合掌をして去った。川の中に浮いていた人も、痛ましい事実としてこの目に焼きついている。橋の中ほどまで来ると、亀戸の方から防空頭巾を肩に背負って、歩いて来る人を見た。近づいてみると、上級生の横山ふじ子さんと分かった。かねて私の尊敬していた人だったので、急に心が明かるくなった。横山さんは夜勤中にこの空襲に出会ったのだ。声をかけ合って無事を喜び合った。横山さんの家も恐らく焼けてしまったと思う。焼け野原に帰って行

くのが気の毒でたまらなかった。お互いに住所を教え合うことも出来ずに、『元気でね。』『体に気をつけてね。』と二人は胸が痛く、言葉も長く交わすことなく別れを惜しんだ。

私はリヤカーを引きながら振り返った。横山さんも振り返り手を振ってくれた。横山さんの家族は無事だったろうか。あれから五十年……。横山さんは今、何処に移り住んでいるのか。あの日、あの橋を最後に今も分からず、あの日のままだが蘇ってくる。

大島町を通り、亀戸に向かって歩く道端にも、防空壕にも、黒く縮んだ悲しい姿を何人も見つつ歩いた。ただ合掌するのみである。裸足で歩くほかはなかった。『ヨっちゃんちゃん、済まないねえ。』……。老夫婦は何度も後から声をかけてくれた。『足は鍛えてあるから大丈夫よ。心配しないで下さいよ。』と答えつつ、線路を目標に新小岩へと歩いた。今考えると、八十歳近いお婆さんもリヤカーを押しつつよく歩いたなあと、感心させられるのみである。何の罪もない人々を、子供や老夫婦までも悲惨な目に合わせた空襲。その恐ろしさをまざまざと体験した私だが、健康で歩けたことが不幸中の幸いだと、心の中で思っていた。

新小岩の家を探し訪ねたのは、夜の九時だった。でもそこの家の人達は皆さん親切にして下さり、身寄りのない老夫婦と私を快く泊めて下さった。人の温かさがしみじみと心にしみつつ、小松崎さんの家で疲れを癒した。

翌朝、心温かい小松崎さん家族と、何時また会えるか分からない老夫婦大沢さんに、別れを惜しんだ。老夫婦とは、この日を最後に五十年とうとう会うことの無かったのが残念でならない。あの日、何回も『有難う』と涙ぐんで別れた姿を忘れることは出来ない。

私は目頭を熱くし、再び自転車とリヤカーを引いた。少し歩くと、藁草履を売る店があった。一足『九十銭』にて買い、裸足に履いた。小さい時、母の作ってくれた藁草履を思い浮かべつつ、新小岩を後に、私は船穂へと歩き出した。



命あるきょうの日 (その二)

渋谷ヨシ

『今年には戦後五十年の節目の年でもあり、永久平和を切望する「祈念文集」を作るので、戦争体験を書いて欲しい』と印旛房総の会、会長の山崎先生から電話を受けました。私は、既に終戦四十六年めに、当時の会長であられまれした檀谷先生から『忘れ得ぬ東京大空襲』と題して書いて欲しいという要請があり、文才のない私だが、今戦争を知らない子供達にその悲惨さや恐ろしさを少しでも伝えることが出来ればと、自分の体験を書いたことがありました。今回は重複を避け、空襲から逃れ、終戦までの体験を思い出すままに書いてみました。

三月十日、私は再び自転車とリヤカーを引いて、一路、船穂へと向かいました。今度はリヤカーに人を乗せていないので、自転車を踏んでみました。だが自転車にはタイヤがあっても、リヤカーはタイヤが燃えて金の輪だけなので、走ろうとしても走れず、結局歩く他はありませんでした。

焼ける前に、食料難でたまたま白井の姉の家を訪れたことがあり、いくらか道も分かっていたので、今回も中山から白井県道へ出て歩きました。それは長い道でした。白井の姉の家に辿りついたのは、すっかり夜になっていました。その頃は電話も無いので、実家へ知らせることも出来ず『今夜はここに泊って、明日は結縁寺へ帰りなさい。』との姉一家の親切な言葉に甘えて、一夜を有難く泊めて貰いました。

その頃の姉の家は、山に囲まれ寂しい所でした。今度は姉の家にリヤカーを置かせて貰い、早朝、焼布団を自転車に積んで実家へ向かいました。ところが、実家へ着いてみると、私が空襲後すぐに帰らないので、死んでしまったと思い込んで、兄が東京の焼け野原へ探しに行ったとのこと。とにかく、無事で帰った私を父母も叔父達も喜んでくれました。私は涙が出てしかたがありませんでした。

私は帰って来る時、中山から白井県道へ、兄は船穂から津田沼の県道を通り、行き違いになってしまったのです。後悔しても間に合いません。あの焼け野原で、兄はどうやって私を探すのだらうと思うと、兄のことが心配で心配でたまりません。疲れたであろう兄は、夜おそく自転車で帰ってきました。焼け跡を見ていたら、声をかけてくれた人がいて聞いてみたら、ヨッチャんは無事で帰ったと教えた人がいて、安心して帰って来たと兄は話してくれました。兄は『無事でよかったなあ。』と自分の疲れは言わずに喜んでくれました。父母や兄の優しさがしみじみと心に伝わり、お世話になる身となりました。叔父達親子も世話になり、そのうえ私まで…。着のみ着のまま焼け出され、今思うと、実家も大変だったと思います。

それから幾日かたったある日、私の家へ牧野正先生が訪れて下さったのです。当時の牧野先生は、船穂国民学校兼船穂青年学校長として勤務していらっしゃいました。先生はご家族様と共に結縁寺に住んでいらっしゃいました。国民服の牧野先生は、私の父に『大家さんから、私が「戦災を受けて帰っているので、学校へ勤めてくれるかも知れないから訪ねてみなさい」と教えられて来ました。』とおっしゃったのです。私はその時、初めて牧野先生にお会いすることが出来ました。あの時の温かいお姿や言葉等を、今も忘れることは出来ません。『ご返事を頂ければ、私が県庁までお連れします。』との有難いお言葉を聞きました。

叔父のおかげで教員免状は持っていたものの、青年学校は未経験なので不安に思いましたが、意を決して県庁へ行くことに返事をしました。牧野先生はお帰りになられました。

さて、返事はしたものの、衣類等はすべて焼いてしまったので、県庁へ行くにも着ていく物がなく、母のセルの着物を貰って、標準服を縫い、それを着て行くことにしました。県庁へ行くといっても、その頃は自由に切符が買えず、牛車でへこんだでこぼこ道を、印旛村を通って渡し舟に乗り、白井駅まで行き、後は電車に乗って牧野先生に随い、県庁にて面接をしたことを今も昨日のここのように思い出されます。

その日から間もなく、学校も新年度が始まり、私は校門をくぐりました。

むかし私が学んだ母校なので、懐かしさで一杯でした。

ところが校庭を見渡しますと、昔の遊んだ校庭は小麦畑となり、さつま芋畑になっていて、遊び場はほんの僅かで、小麦やさつま芋の葉が青く列を作っておりました。食料増産が学校にも及んでいたのです。校庭の隅には防空壕も掘られ、軍の命令なのか、学校に防衛隊長と名のつく兵隊も居て驚きました。学校わきのお宮の森は変わらず静かでした。

私は青年学校勤務でしたが、職員室も国民学校と一緒になので、先生方にも親しくして頂き、不安も少しずつ薄らいでゆきました。青年学校の生徒達と、勉強の他に森へ行って手旗信号を共に学んだり、松林へ行って、飛行機の燃料にする為に、松の木に傷をつけて空缶を下げた松根油をしぼったり、お裁縫等を教えたり、男生徒は銃剣術や藁人形に向かって竹槍を習ったりしました。

ある時は子供らと印旛沼へ肥料のまこもを刈りに行ったり、畑にさつま芋の苗を植えたり、田植えをしたり、行く途中には、同期の桜や予科練の歌を歌う級もあり、子供達からの不平もなく、勝つを信じて勤労の精神に燃え、私達も子供達も頑張りました。先生方も力をあわせて万能をふるい、田起こしの経験もしました。

草深の飛行場も近かったため、時折、空襲のサイレンと空襲におびえたこともありました。

でも、その頃なりの楽しい思い出もありました。牧野先生や田口二郎先生が自ら授業をして教えて下さいました。私は青年学校でしたが、時間の空いている時は模範授業を見せて頂き、そのことが後になって大いに役立ちました。心の励みにもなりました。大きな木の火鉢を囲んでの短歌の研修も、一、二回でしたが、私にとっては有難い研修でした。まだ就職したばかりの四月、大空襲の経験を友等に話した時、牧野先生は歌にして私に下さいました。私がノートに写そうとした時、『私は歌人ではないから、ある人の詠める歌と記すもんだよ。』と笑みを浮かべながら、次の短歌を渡して下さいました。

戦災の焼夷の夜の思い出を ヨシ女手ぶりし
おろおろ語る
ヨシ女いましよくぞ死線を越えて来し 生命ながらえよ
春めぐりこむ
狂乱の悪魔は過ぎぬ余塵なほ 消えぬ焼野に
ヨシ女さすらふ
その昔（かみ）の幼き頃の思い出を 学舎ヨシ女
いまをかなしむ
ひなにみてヨシ女女性の豊なる ころろ培へ
夜明けまつまに



私はこの短歌を頂いたおかげで、大空襲の辛さや苦しさも忘れ、未熟ながらも励んで来られました。当時の小規模学校は事務職員の配置がなく、学級と事務の両立に苦しみながらも、温かい出張所の先生方や牧野先生の奥様にも、会計事務で大変にお世話になったり、又、六合にお勤めだった密島とよ先生の教え等々、五十年経っても忘れることは出来ません。

又、次のようなこともありました。夜になって、突然に空襲警報が鳴り出しました。暗いはずの庭がだんだん明るくなっていくのが、部屋から見えたのです。何だろうと思って外へ出て見ますと、何と飛行機が火だるまになって空を飛んでいるのです。まるで、屋根に落ちてくるかとも思いました。しかし、飛行機が向きを変えたかと思える間に燃えながら落ち始めました。

私は学校へ落ちるのかと思い、急いで身支度をして学校へ向かって走りました。前方に牧野先生の駆けつける姿も見えました。

『戸神へ落ちたぞ。』と誰かの大きな声が聞こえました。学校でなくてよかったと、私は胸を撫でおろしました。騒げつけた牧野先生は、そのまま学校に泊まりました。私は飛行機の落ちて真っ暗になった道を歩いて帰りました。お墓の近くを通った時の冷や汗と不気味さは忘れられません。

母の『お帰りなさい。ご苦労様。』という優しかった言葉が、今も耳に残っています。

そのうちに戦局は不利となる一方で、学徒出陣、硫黄等の玉砕、山本元帥の戦死、沖縄の地上戦、ひめゆり隊出陣、広島、長崎への原爆投下……。沢山の人命を一瞬に奪った悲報に、胸が痛みました。

そして八月十五日、正午の天皇陛下の玉音を拝聴しつつ、敗戦に涙を流し合いました。戦争が終わって間もなく、先生方で皇居への勤労奉仕、焼け跡の整理や草刈り等を体験し、皆、一生懸命頑張って参りました。

とにかく戦争の為に多くの人々の苦しみや悲しみを見てきた私達は、二度と再び教え子を戦場に送ることのないよう、全ての人々が平和に暮らすことが出来るよう、叫び続けねばと思います。恐ろしい核実験を絶対に止めさせなければなりません。戦争で亡くなられた多くの方々のご冥福を、心からお祈り申し上げます。絶対に戦争を繰り返してはなりません。平和の尊さや感謝の心を忘れず、これからも頑張りたいと思います。